

『別妻子良友』 謝 枋得

別妻子良友 謝枋得 妻子良友に別る 謝 枋得

雪中松柏愈青青 雪中の松柏愈青青

扶植綱常在此行 綱常を扶植するは此の行に在り

天下久無龔勝潔 天下久しく無し龔勝の潔

人間何獨伯夷清 人間何ぞ獨り伯夷のみ清からんや

義高便覺生堪捨 義は高くして便ち覺ゆ生の捨つるに堪えたるを

禮重方知死甚輕 禮は重くして方を知る死の甚だ輕きを

南八男兒終不屈 南八男兒終に屈せず

皇天上帝眼分明 皇天上帝眼分明

【作者略伝】

謝枋得(ぼうとくとくともいう) 一二二六〜一二八九

南宋時代末期の政治家・文
学者。字は君直、置山と号す
る。江西省信州弋陽の人。人
柄は豪壯にして直言を好み、
常に古今の国家存亡について
論じた。宝祐四年(一二五六)



に進士に及第(文天祥と同期)、撫州司戸參軍に任命さ
れたがすぐに辞任、民兵を募り元の侵攻から信州を守る
国境守備隊長となる。しかし元との講和を画策する賈似
道を批判して疎まれ流罪にあつた。後年赦され徳祐元年
(一二七五)江西省信州の知事として元軍を迎え撃つて破
れた。南宋滅亡後、姓を変え福建省の建寧に隠遁し、建
陽(現南平市)では占いなどで生計を立てながら門人を
抱え養つたという。元のフビライ・ハーンの要請をうけ
仕官の誘いを受けたが、みずからは「亡国の大夫」であ
ると断固としてこれを拒否。元朝は亡宋の遺臣から一芸
一能に秀でた者がいると聞けば、すべてこれを拉致して
臣としてきた。しかし枋得は再三の要請をも「忠臣二君
に仕えず」と拒み続け、身をもって人臣たる者の節義を
守り通したのである。至元二十五年(一二八八)、第五回
の人材招致が行われ、この時魏天佑により捕らえられ、
大都(北京)に送られることになった。道中から絶食し
翌年四月大都到着直後に壯絶な死を迎える。齡六十三。
妻も二人の子供を連れて山中に潜んでいたが、元の追手
が来たとき、付近の住民に迷惑がかかるからと自首し、
やがて首をくくって自殺した。

【背景】北に送られる日を前に

謝枋得の生きた時代は宋が北方の元に圧迫され、つい

に滅亡する時期にあたっていた。そして枋得自身も元軍に捕らえられ、元の都に護送される際に作ったのがこの詩である。この詩の正題は、「初めて建寧に到り詩を賦し並びに序す。魏参政（天祐）執拘して北に投ず。行くに期有り、死するに日有り。詩もて妻子良友良朋に別る」となっているが、本会では「妻子良友に別る」と簡略にした。つまり魏参政が、自分を無理に捕らえて北方元に連れて行くことになって、その出立の日も決まり、さて元の都へ行けば殺される時も覚悟せねばなるまい。これが誠にこの世の別れであるから、この詩を作って妻子や同志の友、同朋たちに日頃の思いを述べ別れの言葉としたのである。

【意解】

雪の中の松や柏は常緑色を帯びてますます青青としており（同様に自分も困難に耐えていけるし）この（北京に送られる）行為は人の行うべき道徳をしっかりと植え付けるための旅路である。

世の中にはずっと久しく龔勝のような清廉な人はいないし、この世でどうして伯夷だけが潔白といえるだろうか（自分もこの人達のように清潔でありたい）。

義とは元来高尚なもので、これを貫き通すために命を捨てても良いという覚悟はしているし、礼の精神はまことに

重く大切で、これを守るためには死など甚だ軽いものだと自覚している。

唐の南霽雲は男の中の男で、義を重んじて最後まで屈服しなかったではないか。（私も思いは同じで）天地の神神や天子の眼は、はつきりと明らかに見抜いておられるであろう。

【字解】

雪中松柏 「雪中」は困難な情況、「松柏」は冬の寒さにも

耐える緑樹で、困難な環境にも負けない節操。

扶植 思想などを植え付ける。

綱常 人の守るべき永遠の倫理・道徳で三綱と五常のこと。三綱とは君臣・父子・夫婦の道徳。五常

は仁・義・礼・知・信。

龔勝 前漢末。哀帝の光禄大夫（宮中の顧問官）として

仕えていたが、王莽が新を建国した時、野に下った。王はしばしば自分に仕えるよう奨めたが、二君に仕えずとして食を絶って死んだ武將

伯夷 殷代末の人で、新たな周王朝の禄を食むのを潔しとせず首陽山に隠れ住んで餓死した。

南八男児 南家の八番目の立派な男。名を霽雲といい、安

禄山の乱の折、睡陽を巡る戦いで飢えに迫られたが、義を重んじて最後まで戦った。

皇天上帝 「皇天」「上帝」とも天の神。
眼 「眼」は眼力。

【鑑賞】

この詩は、死を間近にした枋得の、妻子や朋友にあてた遺言である。第一句、二句に気持ちの全てが込められている。一句の「雪中松柏愈青青」で、松柏が冬の寒さにも凋むことがないように、自分も死を伴う難難辛辛に遭遇しても耐え、節操や主義を変えない強い意志を有することを示している。類語に「歳寒松柏」（論語の『子曰く、歳寒くして、しかる後に松柏の凋むに後るるを知るなり』に由来）がある。さらに二句目の「在此行」は、人の行なうべき道義を身をもって示そうとした。

三、四、七句で、清廉な人の代表として伯夷、龔勝の潔さ、そして不義に屈せず最後まで戦った南霽雲をあげ、そうした先人の生き様に共感しつつ、五、六句で人の踏み行うべき道として義と礼の精神こそが最も大切であり、自らの死をも辞さない覚悟を表わしている。

【参考】

その一、「文章軌範」の編者として
「文章軌範」とは、官吏登用の科挙受験者のために科目作文の模範となるべきものを枋得が唐宋の「古文」の名

作文章から選り出された模範文例集である。古文とは、それまでの装飾的な「駢文」と呼ばれる文体に対して、唐の韓愈・柳宗元たちが始めた文体で、思ったことをそのままに、しかも簡潔で雄健な調子を持っているものを用う。その運動は宋の欧陽脩や蘇軾によって継承され、宋以後は古文が最も普通の文体となる。従ってこの書は、韓愈・柳宗元・欧陽脩・蘇洵・蘇軾など古文の大家の作品を多く集めている。「古文真寶」「唐詩選」などと同様に科挙試験用の教科書・参考書として重宝された。日本においても室町時代に紹介され、「唐詩選」と共に漢学の教科書となり、幕末には勤皇の志士たちの間で盛んに読まれ、大きな影響を与えた。

その二、中国の模範的な忠臣・義士のひとり

「靖献遺言」という書がある。これは江戸時代初期山崎闇斎の門下の浅見綱斎が編纂したもので、中国の忠臣・義士にして模範とすべき人八人を選んで、その事蹟と詩もしくは文などをあげて、かつこれに関する議論を加えまとめたものである。その八人とは屈平・諸葛亮・陶潜・顔真卿・文天祥・謝枋得・劉因・方孝孺である。いずれも感激し奮い立つような事蹟と文字とを遺した人である。我が国でも幕末に梅田雲濱、吉田松陰らの尊王倒幕派に大きな影響を与えた。

その三、逃亡中に残した詩

武夷山中 武夷の山中 謝枋得

十年無夢得還家 十年 家に還り得たるを夢みること無し

独立青峰野水涯 独り立つ 青峰 野水の涯

天地寂寥山雨歇 天地 寂寥として山雨歇む

幾生修得到梅花 幾たび生きなば 梅花に到るを修し得んや

武夷山は福建省崇安の西南にあり、福建第一の名山である。作者は元軍に敗れて以来十年の間、山間を流浪していた。

(意解)

十年もの間、国事のために奔走し、家に帰ることを夢見ることもなかった。ただ独り、青峰の聳え立つ野水の涯に立っている。

天地はひっそりと物寂しく、山の雨は降りやんだ。幾たび生まれ変わって修練を積んだんだならば、梅の花のような高潔な境地にたどり着けるのだろうか。

これも決して元に屈服しないという作者の民族的な気骨と愛国の情を表現

している。ただ清さの象徴としての梅の花によって自分を慰めるしかなかったのである。

参考文献

- 「元明詩概説」……吉川幸次郎著・岩波文庫
- 「靖献遺言精義」……法本義弘著・国民社
- 「文章軌範 新釈漢文大系」……前野直彬注解・明治書院

